

天声人語

だれしも若いころは自分の才能を疑う時期がある。あまり卖れない俳優兼演出家だったころの蜷川幸雄さんもそうだった。

埼玉県川口市の団地の玄関先に

「蜷川TENSASI」という表

札を掲げた。自分を追い込むためである▼「天才」の看板をあげれば、さぼるわけにはいかない。映画を見て本を読んで懸命に演出を独学した。ただ、「蜷川天才さん」と廊下に響く集金人の声にはさすがに赤面したそうだ▼高校生のころには油彩画家を夢見ながら、劇場に通った。東京芸大の受験に失敗して画家を断念。劇団の道へ進んだ。「キャンバスに絵の具をたたきつけるより、自分の生理に合っている」と感じた▼演劇界の第一線を疾走し続けた蜷川さんが、亡くなつた。シェークスピア劇やギリシャ悲劇を日本の美意識に合うよう翻案した。仏壇や石庭、行灯など日本の美を舞台に取り入れ、観客の視覚を圧倒した▼反骨の人でもあつた。暴力団との交流が報じられた歌手が、紅白歌合戦の出場を断念するなど、「善も悪も混沌とした芸能を規制、管理するのは容認できない」とNHKを批判。局側は「出場を見送るよう要請してはいない」と説明したが、特別審査員の仕事を降りた。30年前の大みそかのことだ▼創作意欲は衰えず、「回遊魚になつて仕事を続けたい」と本紙に語った。自著には「最後まで枯れずに、過剰で、創造する仕事に冒險的に挑む疾走するジジイでありたい」と記した。言葉通り、最晩年まで舞台に情熱を注いだ。